

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 大久保 明子
学位 博士 (保健学)
学位記番号 新大院博 (保) 甲第21号
学位授与の日付 平成30年 3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 小児がんの子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程

論文審査委員 主査 小山 千加代
副査 定方 美恵子
副査 小林 恵子

博士論文の要旨

1. はじめに

近年は、子どもの死を経験した看護師の感情に焦点をあてた研究が増加しており、子どもの死が看護師に与える影響についての関心が高まっている。子どものターミナルケアに携わることは看護師にとっては強いストレスを伴うとされ、看護師への支援の必要性は今なお重要課題である。本研究は、看護師の感情や認識、行動を「態度」と捉え、子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程を辿ることを目的とする。態度の変容という従来には見られない視点から探求することで、子どものターミナルケアに携わる看護師に、いつどのような支援が必要であるか、何が看護師の成長に繋がっていくのかについて示唆を得ることができると考える。それは今後の小児看護の質の向上にも寄与すると思われる。

2. 目的

本研究の目的は、小児がんの子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程を明らかにすることである。すなわち、子どもの死という出来事を看護師がどのように体験し、その後のケアに対する考え方や取り組みに繋がっていくのか、その過程を明らかにする。

3. 方法

参加者は、男性1人、女性12人の計13人であった。参加者の年齢は20～40歳代、看護師経験年数は4～23年、小児看護経験年数は4～19年であり、小児がん看護の経験年数は、4～11年であった。半構成的面接法により、1人47～97分（平均約61分）の面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach, 以下M-GTAと記す）の手法を参考にして質的帰納的に分析した。分析焦点者と分析テーマに関連した具体例に着目し、その具体例が分析焦点者にとってどのような意味を持つのかを考え、概念名を生成した。他の類似例、対極例、概念間の関係を問いながら概念化、カテゴリー化を試みた。なお、本研究は新潟大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 結果

小児がんの子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程は、時間の流れの中で、揺らぎながら変わる6局面として捉えられた。すなわち、小児がんの子どもの看護した看護師は、その子どもの死によって局面1【喪失の悲しみを抱える】。【喪失の悲しみを抱える】には《悲しみに沈む》《後悔する》とともに、初めて遭遇した子どもの死に対する《よく分からない感覚をもつ》が含まれる。しかし、今、闘病している《子どもの笑顔に救われる》《看護することで気持ちが落ち着く》《つながっていると思う》という局面2【関わりの中での慰めを感じる】ことで、《悲しんでばかりいられない》から《気持ちを切りかえよう》と【喪失の悲しみを抱える】に後戻りしながらも、振り子のように局面3【揺らぎつつ変えていく】。このような感情の揺らぎの一方で、ケアにおいては《心の距離を縮めてケアにつなぐ》《場を整えて親子の時間を大切に育む》《母親による手当てをケアに組み込む》《新人の辛さを気遣い共にケアする》という局面4【生きられる時間を意識して技を尽くす】態度へと変わっていく。反面、局面5【闘病支援とターミナルケアの板ばさみに悩む】ことも少なくない。そのような看護の末の子どもの死に対して、局面6【生の限界を了解する】といういわば死さえも承認する看護師の態度変容に至る。

5. 考察

態度変容の初期の過程は、悲嘆の作業と重なる過程として捉えられた。また、【関わりの中での慰めを感じる】という局面は、【喪失の悲しみを抱える】から【揺らぎつつ変えていく】過程における態度変容の要因としての意味が強く、関係性の中に自らが置かれていることの重要性を示している。つまり、小児病棟における子ども、同僚、家族との人間関係の豊かさや他者の心遣いに気づくことが悲しみからの回復の鍵となる。そしてその後の変容の一つのターニングポイントとも捉えられる【揺らぎつつ変えていく】という局面を迎える。揺らぎながらも【生きられる時間を意識して技を尽くす】に繋がるためには、この揺らぎの中に在る看護師への精神的な支援が重要といえる。そこから技を駆使して子どもの看護に自らを投じた看護師は、【生の限界を了解する】といういわば死をも承認する境地に至ると理解された。その一方で【闘病支援とターミナルケアの板ばさみに悩む】という葛藤の表出もあり、ここでは看護師が【生きられる時間を意識して技を尽くす】ための精神的な支援とターミナルケアができるための先輩からの技の伝授を含めた技術的・教育的な支援が重要になると考えられた。そして、【生の限界を了解する】に至った看護師の【喪失の悲しみを抱える】には、《悲しみに沈む》《後悔する》に《苦しみからの解放に安堵する》が加わり、両面的な感情を持つと推測されるとともに、それは看護師の達成感に繋がると考察された。つまり、これら6局面が辿る変容の過程は看護師の成長の過程としても理解された。

審査結果の要旨

1. 保健学・看護学の視点

本論文は、小児がんで亡くなる子どもを看護する看護師に焦点をあて、看護師にとってはストレスの高い子どもの死という体験が、喪失の悲しみや後悔のみならず、実はその後の看護師の態度の変容、すなわち看護に対する考え方や看護行為そのものの変化につながるという看護師としての成長の過程を明らかにしたものである。そして、その変化への影響要因を見出し、たとえ新人であってもターミナルケアに携わることの重要性と、そのための看護師教育充実の必要性、治療の選択における子どもの参画の可能性について示唆しており、従来からの小児看護における課題に応える意欲的で独創性

に富んだ研究である。長年の研究成果と実践が実を結んだ研究として、今後大いに発展可能性がある。

2. 構成と内容

題目 「小児がんの子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程」というテーマは、現在のがん看護学においては大変重要なテーマとして評価される。現状では、緩和ケアやターミナルケアの知見は成人期・老年期を中心としたものであり、子どものターミナルケアについての知見および取り組みの蓄積は未だ十分とは言えないからである。

研究の背景と文献検討 小児がん医療および小児がん看護における本研究の位置づけを、最初に小児がんの特徴と医療における課題、次に小児領域における緩和ケアの特徴と小児がん看護に関する研究の動向と課題について示し、さらにターミナルケアに携わる看護師の態度について、成人・老年領域と小児領域における国内外の文献を検討して系統的に整理して述べ、本研究課題の重要性と意義について明確にしている点で評価される。一方、文献検討が広範囲にわたり、やや統一感に欠けるため、「子どもの死を体験した看護師の研究」に焦点化して述べることも重要ではないかとの指摘を受けた。

方法 本研究は、小児がんの子どもの死を経験した看護師の個別事例から、その時々感情や認識がその後のケア行動にどのように繋がったかという現象を捉えて、その現象の現れ方の一つの枠組みを提示することを目的とした探索的研究である。分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach ; M-GTA) が用いられており、その理論的背景および本研究への適用の理由も明確に示されている。また、M-GTA の研修会への参加とともに、書籍と本手法を用いた研究論文および博士論文に学びながら、質的研究およびM-GTA の研究経験者からの指導を受けて、概念化においては複数の教員と大学院生による検討会で繰り返し検討されており、分析の質の信頼性は確保されていると言える。なお、研究の実施にあたっては、倫理審査を受けて必要な倫理的配慮の手続きがされている。

結果および結果図と考察 質的研究では、分厚い記述を如何に整えて、しかも臨場感を保持しつつ捉えられた現象を描き出すかが鍵となると思われるが、審査委員からは、根拠も含めてわかりやすくまとめられているという評価を受けた。ストーリーラインは結果図を十分に説明するものであり、悲嘆のプロセスと【揺らぎつつ変えていく】という技につながる局面、もしくは悲嘆への折り返し点になる可能性を含んだターニングポイントとしての局面が的確に示されている。現象の起き方における揺らぎと時間性を含んだ結果図となっていることも評価される。考察においては子どもの死と看護師の態度の変容過程の6局面の考察、ターニングポイントとしての【揺らぎつつ変えていく】局面の考察、「板ばさみ」が意味することの考察、悲嘆からの回復と看護師としての成長についての考察が、先行研究や理論を適切に用いて記されており、結果の意味が深められたことで、子どものターミナルケアにとって重要な示唆を得ている。

3. 表現(論旨の一貫性と科学的文章表現)

テーマ、目的、結果、考察は原著論文を中心に構成されており、一貫性を確保しながら明瞭にまとめられている。背景・文献については、丁寧に系統的に整理されており、研究課題の現状と課題の輪郭と焦点がくっきりと描かれ、納得のいく論理展開であるという評価と、統一感に欠けて焦点がしばられておらず、再考の余地があるという評価に分かれた。しかし、既に文献レビューとして学会誌にも掲載されているため、先行研究から導かれた本研究の意義を項立てにする修正のみで、指摘を受けた点については今後の課題とした。概念化の道筋、解釈の過程の明示および結果・考察における詳細な記述は、解釈に飛躍がなく、根拠が示され、文法的にも正しく表現されている。

4. 態度

分厚い研究成果を 30 分で明確に伝えるという点では、発表原稿の内容が大変優れて要点が押さえられていたと高く評価される。ただ、原稿に意識が集中して、スライドの明示、審査委員および参加者の様子に合わせた発表という点では今後の課題と思われる。審査委員の質問には、研究の内容に加えて最近の動向も踏まえた回答がなされ、長年の研究への取り組みと小児看護学の専門性が発揮された内容であった。

「子どもの死を契機とした看護師の態度変容過程」という現象の現れ方の枠組みを明示し、子どものターミナルケアの重要性とそのターミナルケアに携わる看護師の成長、およびそのために必要な支援について示した本研究は、審査委員会において、小児看護の課題に応え、看護の質の向上に寄与する研究として評価された。

以上、論文審査委員 3 名の意見として、本論文は学位規則第 4 条 1 項に定める博士(保健学)の学位を授与するに値するものであり、申請者は保健学における研究活動を自立して行うために必要とされる高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査および最終試験に合格と判定する。